

二十二歳の大学四年生になってからも、千都との関係は変わらない。

大学から少し歩いたところにある、落ち着いた雰囲気のカフェの前。私はそこで、同い年で、同じ講義をいくつか取っている千都と待ち合わせていた。待ち合わせ場所に行くと、背が高く、少し明るい髪色の千都はすぐに見つかった。そして私が見つけたのとほぼ同時に、千都も私に気づいた。整った無感情な顔が、私を見た途端に笑顔になって手を振ってくる。それに合わせ、私も手を振った。

「授業お疲れ！　じゃ、早速中入ろうぜ。チラッと見たけど、今日から期間限定メニューあるって」

「へー、どういうの？」

「キャラメルをやつだって」

「美味しそうだね」

カフェの中に入り、席の向かい側に座った千都は、相変わらず話が上手くてすぐに他愛のない話で場を盛り上げてくれる。彼との会話は面白くて、私はい

つの間にかリラックスしていた。

今日も注文したコーヒーを一口飲みつつ、大学の課題を進めていたが、しばらくたって千都がいたずらっぽく目を細めて身を乗り出してきた。

「ねー美希。ちょっと面白そうな『実験』あるんだけど、付き合ってくんない？」

「実験……？」

「そうそう。実は最近、面白いアプリ見つけてさー。催眠アプリなんだけど、本当に使えるか試してみたいんだよねー」

唐突な言葉に私は驚いた。

「催眠？　なにそれ？　千都、そんなことまで興味あるの？」

「いや、マジで信じてるわけじゃないけどさ！　美希なら素直そうだし、なんかかかりそうじゃん」

「ええ……」

「どうせネタだと思うけど、ちょっと面白いじゃん

？　けど催眠アプリは2人じゃないと試せないからさー。な、ちょっとだけどう？」

「……まあ、千都が言うなら、別にいいけど……。確かにちょっと面白そうではあるかな」

深く考えずにそう頷くと、千都は満足そうに微笑んだ。なんだかその笑みが若干いつもと違うように見えたけれど、その違和感はすぐに消えていった。

「あ、けど一つだけアプリに書いてあるルールね！

催眠ってさ、一回入り込むと途中で止めるのがムズいんだって。だから、最後まで俺のペースでやらせてくれる？」

「うん。わかった」

「ありがと！　じゃあ、アプリ起動するから。リラックスして、椅子の背もたれに体預けてさ……ゆっくり、目閉じてみて？」

千都がスマートフォンの画面を操作すると、静かな電子音が流れ始めた。

「え、ここでやるの？」

「大丈夫だって！ 誰も俺らのことなんて気にしてないからさ！」

千都の自信たっぷりの言葉に背中を押されるようにして、私はそっと瞼を閉じた。

「いいよ、そのまま俺の声だけ聞いて。外の音とかはさ、遠くで鳴ってるBGMかなんかだと思って聞き流しちゃって」

不思議な感覚だった。視界を閉ざすと、千都の明るい声だけが耳の奥にダイレクトに響いてくる。

「そうそう、上手じゃん。……じゃあさ、俺の言うこと、全部聞いてくれる？」

「うん……」

意識がとろとろと、柔らかに解けていく。

「美希は今から、俺の言葉にだけ応えるようになるよ。否定しないで、全部『うん』って受け入れて。ほら、深く呼吸しょ？ 吸ってー……吐いてー……」

意外と様になっている。というか、本当に催眠術があるなら、こんな感じなのかもしれない……。

「いい子だね、美希。そのまま……」

パチンと千都が軽やかに指を鳴らした。

「……さてと！ 今の音で催眠のスイッチが入ったよ。もう、俺の言うこと聞けるっしょ？」

「うん」

(……え？)

自分の返事に、一步遅れて戸惑いが生まれた。意識ははっきりしているのに、喉が勝手に動いて、迷いなく肯定の返事を口にしていた。自分の声が、自分のものではないみたいだ。思考と体がバラバラに